

〈原著論文〉

聴覚障害者の使用する手話の特徴の分析

成相 俊樹*

(問題・目的) 文部省(1993)は、ろう教育の現場では「国語に対応した」手話を用いる必要があるとしている。しかし、実際に聴覚障害者が使用している手話には日本語にとらわれない手話独自の特徴を有しており、筆者はその特徴をろう教育に活用する効果があると考え。先行研究により手話の特徴が挙げられているが、実際に聴覚障害者が一般的に使用している確証を得ていないものがある。そのため、本研究の目的として、手話の特徴を聴覚障害者が一般に使用しているかを確認することとした。

(方法) 14名の聴覚障害者の協力を得て、手話表現の収集・分析を行った。

(結果) 先行研究の挙げる45の特徴の内、36の特徴を確認することができた。

(考察) 手話表現の題材が限定的な場面なため、全ての特徴を見いだすことができなかつた。しかし、日本語にはとらわれない手話特有の表現方法をはじめ、様々な特徴を確認できた。本研究により、手話の特徴をろう教育に活かす効果の可能性を示すことができたと考え。

1. 問題の所在

文部省は1993年に、「聴覚障害児のコミュニケーション手段に関する調査研究協力者会議報告」を公表し、手話をろう教育の現場で活用することの必要性を述べている。その中で、指導者が教科指導の際に使用すべき手話は、「国語に対応した」手話、いわゆる日本語対応手話を利用するべきであると述べている。木村・市田(1995a)は、手話には日本語の統語規則に対応している日本語対応手話と聴覚障害者が日常的に使用し日本語とは異なる統語規則を持つ言語である日本手話、さらに両者の文法規則を有する中間型手話があると述べている。一方、長南(2001)は、「ろう教育に用いる手話表現の種類を限定するよりは学習内容の記憶や理解といった学習過程に合わせて、これら3種類の手話を使い分けて活用した方が学習を促進させる」と述べている。

長南(1994a),長南・井上(1998),長南(2000)は、学習や認知における手話の有用性を示している。また、斉藤(1999)はろう者の意見から、ろう者にとって日本語対応手話・中間型手話を見ることは、日本手話と比べて大変な苦痛を伴い、複雑な話をする上で大きな障壁となると述べている。このことから、教師が、日本手話の特徴を少しでも含むことができれば、児童生

徒の学習における負担を軽減し、学習以外の面でもよりよい信頼関係を築くという効果もあると考えられる。学習面だけではなく、児童生徒とのコミュニケーション、児童生徒理解においても日本手話の特徴の有用性が指摘できる。

日本語対応手話・中間型手話に日本手話の特徴を導入する効果の可能性を述べたが、その効果を確認する以前に、肝心の日本手話の定義・特徴が今だ明らかにされていないのが現状である。日本手話についての特徴を述べた研究はいくらかあり、貴重な資料を提供しているが、それらの研究の述べている特徴には、聴覚障害者が一般に手話表現の中で実際に用いているものであるという確証を得ていないものがある。それ故、各研究が示している日本手話の特徴を、実際に手話を用いる一般の聴覚障害者の手話表現の中に、それらの特徴が含まれているかどうかを確認する必要がある。各研究の述べる日本手話の特徴が、実際に使用されている表現であるかどうかを再確認することは、ろう教育・ろう学校の児童生徒・教員にとって有益であると考えられる。

2. 研究の目的

各先行研究により示されている日本手話の特徴を、複数の聴覚障害者が一般的に用いているかを確認し、年齢や手話の使用年数から考察する。

* 島根県立松江緑が丘養護学校

3. 研究の方法

手話表現を収集・分析するに当たり、長南 (2001) より多くを参考とした

A. 手話表現収集の手続き

手話表現者 日常的に手話を用いる聴覚障害者14名 (表現者の詳細は、資料Aに記載)。手話表現者の選定として、日本手話・中間型手話・日本語対应手話などの区別は設けなかった。というのは、3つの手話の分類はなされておらず、その使用においても、場や相手が変われば変化するという不安定なものであるためである。また本研究は、各先行研究の述べる日本手話の特徴が、実際に聴覚障害者によって一般的に用いられるものであるかどうかを再確認することが目的であるため、厳密にそれら3種類の手話の区別を設ける必要はないと判断し、これらの区別は避けた。

受信者 手話表現にあたり、自然な表現の収録のためには伝達の相手が必要であると考え、受信者を置いた。受信者の条件として、手話表現者にとって親しい者で、手話を用いる聴覚障害者を設定した。というのは、受信者に中間型・日本語対应手話使用者 (特に聴者) を設定した場合、手話表現者が手指モードを受信者に合わせるコードスイッチング (神田・藤野, 1996) を起こすと考えられるためである。しかし、手話表現収集の都合上、一部、受信者として相応しい者を設定できなかったため、やむを得ず受信者を聴者 (著者) とした。

手話表現の収録方法 手話表現の収集には、WAIS-Rの低位検査のマンガ (二人の子どもが本を取り合う中、おじいさんが仲裁して本をもらおうという内容) を説明する課題を設定した。この題材を選んだ理由は、①マンガの絵がはっきりしていること、②マンガの話の流れがわかりやすいこと、③話にオチがあるため、表現者の積極的な表現が期待できること、④登場人物が3人のため、様々な表現を期待できること、4点である。手話表現の収集は、表現者が受信者に対し、マンガの内容を説明している手話表現をDV録画した。

B. 手話表現の分析の方法

分析者 本研究の著者1名。分析が難しい際には聴覚障害者 (21歳) の協力を得た。

分析の信頼性 本研究の分析の信頼性を図るにあたり、いわゆる日本手話を解し、中間型・日本語対应手話も理解可能な聴覚障害者 (33歳) の協力を得た。

別々に分析を行った著者と協力者の一致率は91.3%だったため、本研究の分析の信頼性は妥当なものとした。

分析の手続き DV録画した手話表現をパソコンに取り込み、分析を行った。分析結果の一例は、資料Cに挙げた。分析をする視点は、①手話表現、②右手の動き、③左手の動き、④表情、⑤うなずき、⑥口形、⑦視線、⑧その他 (体の動きなど) の8点について行った。

アンケート 年齢、手話開始年齢や生育歴などが手話表現に影響があると考え、アンケートを行った。その際、プライバシーに配慮し無回答を可能とした。集計結果は資料Bに挙げた。

手話表現者の区分 本研究では、手話表現者を便宜的に『手話経験が豊かな群』(h・j～n; 8名)と『比較的手話経験が少ない群』(A～E・G; 6名)の2群に分けた。前者は手話を使い始めた年齢が16歳未満 (高校入学前) で、年齢の半分以上手話を使用している表現者とし、呼称のアルファベットを小文字とした。後者は手話を使い始めた年齢が16歳以上 (高校入学後) で、手話の使用期間が年齢の半分に満たない表現者とし、呼称のアルファベットを大文字とした。手話表現者Gについてはどちらの群にも属さないが、表現者Gが、考える際には日本語で考えると述べたことから母語は日本語であるとし、表現者Gを『比較的手話経験が少ない群』とした。

4. 手話表現の分析の結果

本研究の結果として、以下の特徴が挙げられた。項目の数字は、本研究における手話の特徴の通し番号である。先行研究の述べる45の特徴のうち、本研究では36の特徴が見られた。

(1) 手話全体に一般的に見られる特徴

1. 基本の語順はSOVであること

日本手話の基本語順は日本語と同様で、SOV (主語-目的語-動詞) であると、本名(1978)、米川(1984)、市田 (1991) は述べている。

本研究では、表現者が示したSOVの語順であった文の総数は37文であった。S・O・V全てを表示している文の中でSOV以外の語順のものは、SVO (4文)・OSV (4文)・OVS (2文) であった。このことから、SOVは基本的な語順であると言える。

2. 一部の例外を含むが、語順パラメーターに準じていること

市田 (1998a) は、日本手話は語順パラメーター (Comrie.1989) に対応していると述べている。語順パラメーターとは、一般的な相関として以下の事が挙げられるという。

VO, Pr(=Ap N), NA, N Rel

OV, Po(=N Ap), AN, Rel N

V= 動詞, O= 動詞, Pr= 前置詞, Po= 後置詞, Ap= 接置詞, N= 名詞, G= 属格, A= 形容詞, Rel= 関係節

本研究では、手話は語順パラメーターに必ずしも一致しているとは言えないという結果となった。以下にその理由を示す。まず、(1)-1で、手話はSOVを基本語順であると述べた。これから、語順パラメーター (Comrie.1989) に当てはめてみると、OV言語である手話は、後置詞を持ち、形容詞+名詞、関係節+名詞という語順になる。後置詞は、(3)-20で述べている通り1回しか見ることができなかつたため、当てはまっているとは言えない。形容詞+名詞では、(3)-18で述べているが、名詞+形容詞に比べ、形容詞+名詞の語順の表現が大変少ないことから、一般的とはいえない。関係節+名詞については、(3)-19で述べている通り、手話の一般的な語順として、関係節+名詞が用いられるとした。

これらから、手話は語順パラメーターの一般的な相関に全ては当てはまっていないが、一部例外を含む形で、語順パラメーターに則していると言える。

3. 単文が単位となっていること

本名 (1978) は日本手話は「多くの場合、論理構成は単文を単位とする」と述べ、白澤・斎藤 (2002) は手話の表現の多くは短文を単位とするとしている。

本研究において、表現者の表した手話表現の総数は、1,005語であり、手話表現の意味の切れ目の総数は262回であった。語数から意味の切れ目の数で割ると、3.8語であった。それゆえ、手話の特徴として、表現の多くは単文を単位とすることが言える。

5. 空間を利用した表現があること

木村・市田 (1995a) は、縦・横・奥行きなどを利用して物事の位置関係を示したり、動作の方向を示したりする空間を利用した表現があると述べている。本研究においても空間を利用した表現がいくらか見られた。以下にその中の一つをあげる。

「出会う」(2人の子どもの位置を想定し、「1」の形をした両手を動かし、任意の場所で「出

う」という手話表現を示した。そうすることで、その人物が始めにいた場所と、出会った場所を、空間を利用し表現していた。)

6. 写像性の高い表現があること

木村・市田 (1995a) は、日本手話には写像性の高い表現があると述べている。

本研究でも、写像性の高い手話表現がいくつか見られ、手話には写像性の高い表現があると言える。以下にその一部を挙げる。

読む 歩く 言う ばいばい 帰る 本 ふくれる
握手 飛びかかる 拾う 歩く

8. うなずき・指差しといった文法マーカがあること

長南 (2001) は、表現の中に手話の文法マーカが観察されると述べている。

本研究では、文法マーカをうなずきと指差しに注目し分析を行った。すべての手話表現者のうなずきの回数の合計は412回、1人平均では、29.49回見られた。また、すべての表現者の指差しの合計は91回で、1人平均では、6.50回であった。これらから、うなずきと指差しが文法マーカとして使用されると言える。

(2) 文における手話の表現に関わる特徴

9. 語順が SVO・OSV になること

日本手話の特徴として、基本の語順がSOVであることは、(1)-1ですでに述べたが、本名 (1978) はSVO (主語-述語-目的語) となる場合があると述べている。また、市田 (1998b) は基本のSOV以外の語順を示すことを述べている。

本研究では、基本のSOVの語順以外に、SVOの語順は全体で4文、OSVの語順は4文、OVSの語順は2文が見られた。SVO・OSV・OVSの語順の実際に見られた例として、以下に挙げる。

・SVOの語順

「子ども2人」指差し(主格)「忘れる」「面白い」「本」
“2人の子どもは、マンガを忘れた”

・OSVの語順

指差し(目的)「私」「欲しい」
“それを私は欲しい”

・OVSの語順

「面白い」「本」「見る」「2人」「子ども」
“2人の子どもはマンガを見つけた”

OVSの語順は2文だけだったため、明確に一般的であるとは言えないがOVSという語順の存在は本研究で見ることができた。またSVO・OSVという語順があるということが、本研究によって示す

ことができた。

10. 補文構造（関係節）をもつこと

本名(1978)は手話は補文構造をもつと述べている。本研究で見られた補文構造の総数は19であり、1人平均では1.36であり、一般に使用されている特徴であると言える。本研究の中で見られた補文構造の例を以下に挙げる。下線部は補文構造である。

「子ども」「公」「遊ぶ」「中」「たまたま」「面白い」「本」「見る」「2人」「子ども」指差し(目的格)「読む」「欲しい」「思う」

“子どもが公園で遊んでいる時に、偶然マンガを見つけた子どもは、それを読みたいと思った。”

11. 時制を表す際、時制を表す助動詞「した」「終わり」が用いられること

神田(1994)は、手話の述語は時制による語形変化がなく、文頭に時を表す副詞をおいて表現すると述べている。また、市田・川畑(2000)は、「した」という過去を表す助動詞があると述べている。

本研究では時制を表す副詞が表現されることを見ることはできなかったが、以下に本研究でみられた時制を表す助動詞を挙げる。

した(でした) [過去] 7回, 終わり [完了] 7回,
中 [途中] 2回

「中」の表現については2回という少ない表現回数であったため、一般的とは言えない。「した」「終わり」の表現については、一般的に使用されている表現であるということが言える。

12. 体の向きを変えて動作主を示すこと

小田(1994)は身体方向の変化として、上体を左右に移動させることにより動作主などの意味役割を表現すると述べている。

本研究では、上体の向きを変化させることで動作主を示すものが91回見られ、1人平均では6.50回であったため、一般的な特徴と言える。

13. 文末に見られるうなずきによって、終了・主語の切り替えの役割が示されること

市田(2001)は、「文末の『うなずき』のうち、手指単語の表出後に時間差をおいて現れるうなずきは、相手の注意をひく眉と目のふるまいを伴って、同意要求、ないし、確認」の意味をもつと述べている。

本研究では、時間差をおいての文末のうなずきを見ることができた。総表現数は60回で、1人の平均は4.29回であった。文末のうなずきとして以下の役割のものが見られた。

終了38回, 同意2回, 補足1回, 断定1回, 決心1

回, 疑問1回, 主語の切り替え7回

本研究では、文末のうなずきの役割として、同意、補足、断定、決心、疑問を見ることができたが、表現回数が少なく一般的とは言い難い。表現回数多い終了、主語の切り替えの役割については、手話の特徴として存在するということが本研究から言える。

14. 文末のあご上げは、命令を示すこと

市田(2001)は、「文末の『あご上げ』は、命令文であることを示す。」と述べている。

本研究では、表現の中から、文末のあご上げは7回見られた。『比較的手話経験が少ない群』において1人だけ表現し、その他の6回は全て『手話経験が豊かな群』の表現者が示していた。文末に見られたあご上げの役割は、命令のみであった。

(3) 分節における手話の表現に関わること

15. 疑問詞を用いる際には日本語と異なる語順となるが、日本語と同じ語順を示すこともあること

本名(1978)は疑問詞を伴う際には、日本語との語順が異なることを述べている。また、白澤・斎藤(2002)は、日本手話の特徴としてではなく手話通訳においてであるが、「疑問詞における疑問と動詞の語順の転換」があると述べている。

本研究では疑問詞を用いて語順が変化した総数は7回であった。『比較的手話経験が少ない群』で示されたものは1回だけであり、残りの6回の表現は『手話経験が豊かな群』で示された。また、疑問詞を用いても語順が変化しなかった回数もまた7回であった。だがこちらでは、『手話経験が豊かな群』では1回だけで、残りの6回は『比較的手話経験が少ない群』が示していた。これから、『手話経験が豊かな群』が疑問詞の語順に関して日本語の影響を比較的受けておらず、『比較的手話経験が少ない群』では多くの影響を受けていることが考えられる。これらから、疑問詞を用いる際には、日本語と異なる語順になるという手話の特徴があると言える。しかし、それと同時に一般に用いられる本研究の手話の表現の中では、日本語と同じ語順であるものも存在すると言える。以下に、両方の語順の例を示す。

・日本語と異なる語順

おじいさん「分ける仕草」「本」「面白い」「誰」
指差し(目的格)

“おじいさんは2人を分け、誰のマンガかと聞いた”

・日本語と同じ語順

指差し(その)「本」「誰」「モ(指文字)」「まだ」

「決まる」「ない」

“その本はまだ誰のものかは、まだ決まっていない”

18. 形容詞と名詞の語順は、名詞＋形容詞が一般的であるが、形容詞＋名詞と表現することもあること
日本手話の形容詞と名詞の語順については、(1)－2で述べた語順パラメーターに準じて、市田(1998a)は形容詞＋名詞となると述べている。

本研究では形容詞＋名詞の語順は2回、名詞＋形容詞の語順は6回示されていた。大きな差は見られないが名詞＋形容詞の語順の方が一般的であると言える。また、形容詞＋名詞という語順の存在を明らかにすることができた。以下に、形容詞＋名詞の語順、名詞＋形容詞の語順の表現を挙げる。

形容詞＋名詞 「悪い」「男」

名詞＋形容詞 「おじいさん」「はげ」

19. 関係節＋名詞の語順となること

形容詞と名詞の語順と同様に、(1)－2で述べた語順パラメーターに準じて、市田(1998a)は関係節＋名詞になると述べている。しかし、長南(2001)は「修飾句は名詞の後ろに表現され、句と被修飾句の間に小さなうなずきと、それに続くポーズといった手話の文法マーカーが見られた。」と述べている。

本研究においては、前者の関係節＋名詞の表現が8回表現され、後者の名詞＋関係節の表現は1回のみ見ることができたが、一般的な特徴であるとは言いがたい。以下にその表現を挙げる。下線部は関係節である。

名詞＋関係節

「おじいさん」指差し(主格)「普通」「ネクタイ」「ハゲ」「おじいさん」「ハゲ」「歩く」…

“ネクタイをした普通のはげたおじいさんは歩いて”

関係節＋名詞の語順は全体で8回表現されており、一般的な特徴と言える。以下に、本研究で見られた手話表現を挙げる。下線部は関係節である。

関係節＋名詞

指差し(目的格)「読む」「欲しい」「思う」「おじいさん」「本を拾う動作」「本を読む動作」

“それを読みたいおじいさんは、本を拾って読んだ”

21. 話の始めに場面設定が見られること

本名(1978)は「手話では、できごとを説明する時には、まず場面を設定する場合が多い。」と述べている。場面を設定するとは、景色や時、状態を本題の前に表現してから、話し始めるということである。

本研究で見られた話の始めの場面設定は総数で19回表現され、1人平均では1.36回であった。これらから、手話にはまず場面を設定する特徴があると言える。『手

話経験が豊かな群』では平均2.0回示され、『比較的手話経験が少ない群』では0.5回であり、大きな差が見られた。以下に、本研究で見られた表現を挙げる。

「悪い」「男/男」「2人」「いる」

(/は、両手で同時に表現していることを示す)

“悪い男(の子)が2人いる”

22. 役割演技は、体の向き・視線の変化・表情の変化によって示されること。

長南(1994b)は「登場人物を演ずるという方法(Narrative Production)」が日本手話に見られると述べている。また、小園江ら(2000)は「手話言語におけるロールシフトとは、話者が現在の話者以外の他者(過去/未来の話者も含む)の役割を演じることである。」と述べ、さらに長南(2000)は日本手話には「登場人物そのものを演じるという特徴がある。これは、役割演技と言われるものであり、手話表現者が表情などを利用し登場人物になりきって、あたかも演技をするかのような表現技法である。」と述べている。

本研究では役割演技の表現は128回見られ、1人の平均は、9.14回であった。『手話経験が豊かな群』は12.38回で『比較的手話経験が少ない群』は4.83回であり、大きな差が見られた。以上より、役割演技が用いられることは手話の特徴の1つであると言える。

25. 役割演技の使役構文が見られること

小園江ら(2001b)は日本手話では使役表現を役割演技を用いて表現していると述べている。

本研究では、役割演技の使役構文の表現が5回見られた。以下に役割演技の使役構文の一例を挙げる。下線部が役割演技であることを示す。

①「おじいさん」②「本」「読む」「ケンカ」「やめる」「子ども」「友達」「お願い」

③「子ども」④「分かる」⑤「友達」

“おじいさんは「本のケンカをやめなさい。子どもは仲良くなって下さい」と言った。子どもは、「分かった」と言った。仲直りした。(仲直りさせた)。”

①「おじいさん」は、使役の主語を示し、②は働きかけを示す役割演技であり、③「子ども」は目的語、④は②に対する応答の引用(役割演技)、最後に⑤行為が用いられている。5回示された役割演技の使役構文はいずれも『手話経験が豊かな群』に見られた。この表現技法は、それに対応する日本語とは大きく異なる。それゆえ、『比較的手話経験が少ない群』には表現が見られなかったと考察できる。さて、『手話経験が豊かな群』8名のうち、5名がこの役割演技の使役表現を示したということから、これは日本手話の特徴

であるように考えられる。日本手話を一般的に見られる手話であるとするかどうかであるが、本研究の目的は、日本手話の特徴をろう教育に生かすことが目的であるので、本研究においては、この役割演技の使役構文という特徴を一般的に見られる手話の特徴とした。

26. 視線により、役割演技・場所・対象を示すこと

小園江ら(2000)は日本手話において役割演技において視線が変化し、他者の視線を表していると述べている。また、長南(2000)も、役割演技において「表現者の視線は話の聞き手からはずれ、対象物などがあると仮定された空間をみるのである」と述べている。

本研究において、役割を持っていると思われる視線の変化は、全ての表現者の総数では111回で1人の平均は7.93回であった。視線の変化の役割として、役割演技・場所・対象の3種類が見られた。役割演技とは、役割演技を示す視線の変化であり、ある一定の場所を見るといった、登場人物を演じているような視線の使い方であり96回の表現が見られた。これは長南(2000)の知見と一致する。場所とは、役割演技以外の場合の視線の変化の中で、ある特定の場所を見ることで、物が視線の先にあることを想定するものである。例えば、「本」という手話を伴いながら、右下を見たとなると、その視線の位置である右下に「本」があると示すことである。この視線で場所を示すものは20回見られた。対象とは、先の場所の技法で示した物をもう一度示す際に用いる方法である。例えば、「本が欲しい」と表現する時は、本を以前示した場所・本を想定した場所を見て、「欲しい」という手話を表現することで「本が欲しい」という表現することである。この視線の変化で、対象を示すというものは、9回見られた。『手話経験が豊かな群』では、上記3つの視線の役割が見られたが、『比較的手話経験が少ない群』では、対象が示されず、役割演技と場所の表現が見られた。これらから本研究では、視線の変化により、役割演技を示すこと、場所を示すこと、対象を示すことが言える。

27. 非手指動作によって、感情を表すこと

Liddell(1980)は手話にも、動作、状態、性質を修飾する表現があり、それは、語によって表現されたり、動詞を表現する時間の長短、速度、繰り返しの回数、または表情などによって表されたりすることなどを明らかにしている。つまり感情は、明確な手指単語のみではなく、表情などの非手指動作によっても、表されている。

本研究では、非手指動作によって感情を示している

表現が、134回あり1人の平均は9.57回であり、『手話経験が豊かな群』では12.75回、『比較的手話経験が少ない群』では5.33回であり、大きな差が見られた。

28. 非手指動作によって、推量を表すこと

長南(1994b)は推量の表現形式について、「表情と述語の形態変化により表され」と述べている。本研究では表現者が「本」を示す際に、推量を表す表情と首を傾げる動きに伴って、手話表現が鈍くなるものが3回見られた。よって、推量を表す際には、推量を表す表情と首を傾げる動き、手話表現が鈍くなる特徴があるとする。

29. 接続部のうなずきで、時間・理由・主部・主語の切り替えを示すこと

市田(2001)は、「接続節の接続部に現れるうなずきは、接続節が時間節ないし理由節であることを示す。」と述べている。

本研究では、接続部に見られるうなずきは98回見られ1人の平均では7.00回であった。『手話経験が豊かな群』では7.25回、『比較的手話経験が少ない群』では6.67回であり、大差はなかった。接続部に見られるうなずきの役割として、以下のものが見られた。

時間28回、理由27回、主部27回

切り替え14回、内容1回、逆接1回

この中で、時間、理由、主部、切り替えの役割は、一般的な特徴であると言える。

(4) 語句における手話の表現に関わること

30. 代名詞がそのまま動詞的な利用をされること

長南(1994b)は「代名詞と動詞が結合して表現されていた」と述べている。

本研究では、代名詞がそのまま動詞的な利用をされる表現は23回、1人平均では1.64回であった。本研究で見られた、表現を以下に挙げる。

「おじいさん」「おじいさんが来る様子」

(おじいさんの手話の形を、そのまま移動させる)

“おじいさんが来た”

31. 動詞の運動の一致が見られること

長南(2001)は「日本手話の表現で変化動詞が用いられる場合、動詞の運動の一致という表現が見られた。」と述べている。

本研究で動詞の運動の一致は83回、1人の平均では5.93回であった。『手話経験が豊かな群』は8.38回、『比較的手話経験が少ない群』は2.67回であり大きな差が見られた。本研究で見られた表現を以下に挙げる。

「2人が歩み寄る様子(「歩く」/「歩く」)

(「歩く」を両手で左右の両端から中心に向かって移動させる。)

34. 動詞と併せて代名詞を示し、動作主を表すこと

市田 (1991) は日本手話においては利き手で人や物などの代名詞を示し、それがさまざまな運動することを非利き手によって表し、「-が…する。」という意味を表すと述べている。

本研究で5回の表現が見られた。以下に本研究で見られた表現を挙げる。

「帰る」(右手) / 「2」(左手)

(左手の「2」とは、子ども2人を表し、ここでは、「2人の子どもは帰った」という意味で示されている。「帰る」の動作主が2人の子どもであることを、同時に左手で「2」を示すことで表している。)

実際に表現が見られた回数が5回とやや少ないが、一般に用いられる表現とする。

35. 2つの代名詞を同時に示すこと

長南 (1994b) は、日本手話では「2つの代名詞が同時に提示されていた」と述べている。

本研究では、2つの代名詞を同時に示す表現が、全体で20回、1人平均では1.43回であった。2つの代名詞を同時に示す表現を以下に挙げる。

「男」(右手) / 「男」(左手)

(ここでは、「男」は男の子を示しているが、両手で示すことにより、男の子が2人いることと、その男の子の位置関係も同時に示している。この表現の際には、両手はそれぞれ中央から離れた位置に表現され、「男の子2人がいる」という意味に加え、暗に男の子2人は、離れているおり、一緒にいる訳ではないということも示している。)

36. 付帯状況により、2つの動作を同時に示すこと

長南 (1994b) は「右手と左手で別の手話を表すことにより2つの動作が同時に行われていることを表していた。」と述べている。さらに、長南 (2001) はこれらの表現を「付帯状況」と呼んでいる。

本研究では付帯状況の定義を、「右手と左手で別の手話を表す」というものではなく単に2つの動作を示している表現とした。この理由として、動作を示す際には手指のみで表現するのではなく、役割演技など体を使った表現や、視線を使った表現などが見られることから本研究では付帯状況の定義を2つの動作を示している表現とした。さて本研究の中で見られた付帯状況の表現数は24回であり、1人の平均は1.71回、『手話経験が豊かな群』では2.38回、『比較的手話経験が少ない群』では0.83回と大きな差が見られた。以下に、

本研究で見られた付帯状況の表現を挙げる。

「本を読む」「歩く」(右手) / 「本」(左手)

(視線は左手を見ている)

“本を読みながら歩いた”

37. 動詞を繰り返すことによって継続を示すこと

長南 (1994b) は、日本手話では「動詞を繰り返すことにより、継続の意味を表現」と述べている。本研究では、動詞を繰り返し継続を示した表現は22回見られた。表現者1人の平均は、1.57回であり、『手話経験が豊かな群』では2.38回、『比較的手話経験が少ない群』では0.50回と大きな差が見られた。以下に、本研究で見られた表現を挙げる。

「ケンカ」(通常の3倍ぐらい表現を続ける)

“ケンカが続いた”

38. 手話の単語により、副詞的表現を示すこと

長南 (1994c) は日本手話では副詞的表現を表す「述語を修飾する手話の単語」があるとしている。

本研究では、手話の単語で副詞的な表現を示すものが見られた。以下に、本研究で見られた手話単語挙げる。

たまたま3回、ようだ2回、へえ2回、なぜか2回、続く2回、一番1回

「へえ」以外の上記の手話単語は単一で使用されるのではなく、他の表現を修飾させて表現されていた。「ねえ」の手話単語では、関心といった意味を含んでいる表現であると判断し、副詞的表現を示すとした。

39. 手話表現の早さ・回数で副詞的表現を示すこと

長南 (1994c) は「述語の運動の早さ、大きさ、回数などが、基本的な表現と比べて変化」があるとき、副詞的表現を表す形態の一つであると述べている。

本研究では、手話表現の早さ・回数により、副詞的な意味を表す表現がいくつか見られた。以下にその示された副詞の意味を以下に挙げる。

継続22回、しつかり11回、必死5回、勢い3回、驚き2回、(以下1回) 納得、一心不乱、もっと、早く、堂々、渋々、興味なし、やっと

上記のものは、手話表現を変化させて示された際に、示されたと思われる副詞的な意味である。多くは役割演技の際に用いられた。手話表現が早くなった際に示されたものは、勢い・驚き、早く、興味なしであり、その他の副詞の意味は、手話表現の表現回数が多く表現された際に示されたものである。しかし、手話表現の大きさを変化させることにより、副詞の意味を表す表現は、本研究では見ることができなかった。それゆえ本研究から、手話には表現の早さ・回数を変化させ

ることにより、副詞的な意味を持たせる特徴があると言える。

40. 文末の指差しにより、主語・目的語を示すこと

鳥越 (1991a), 市田 (1994) は、日本手話の文末の指差しは、文中の主語を示すと述べている。

本研究では、文末に示される指差して、3つの役割を示すことが見られた。以下にその種類を挙げる。

主語 8回, 目的語 7回, 場所 1回

以下に、本研究で見られた表現を以下に挙げる。

主語を表す文末の指差し

「ある」「本」「本を拾って読む動作」「行く」

「得意」指差し (主格)

(この指差しは、おじいさんの位置を差しており、主格を表している。)

“おじいさんは、落ちている本を拾って、読みながら歩いて行った”

目的語を表す文末の指差し

「おじいさん」「歩く動作」「歩く」「見る」

指差し (目的)

(この表現の前に、2人の子どもがケンカをしている場面を示しており、指差しは、そのケンカという表現を示した場所を指していた。この表現では、指差しは“それを”という日本語に対応している。)

“おじいさんが歩いてきて、それ (2人の子どものケンカ) を見た。”

場所を示す文末の指差し

「本」指差し (場所)「ある」「男/男」

「2人が移動する様子」指差し (場所)

(指差しが文中と文末に2回示されている。どちらの指差しも本のある場所を示している。)

以上のように本研究では、文末の指差して主語を表すもの、目的語を表すもの、場所を表すものを見ることができた。しかし、場所を表す文末の指差しについては、表現回数が1回であり、一般的に見られる表現であるとは言い難い。よって、本研究から、文末に見られる指差しは、主語を示す役割、目的語を示す役割があると言える。

41. 無変化動詞の後の指差しは、無変化動詞の主語を示すこと

鳥越 (1991a) は、手話の述語には、変化動詞 (鳥越, 1991a) のほかに無変化動詞 (鳥越, 1991b) と呼ばれる動詞の方向を変化させることができないものがあり、指差して動作主、2, 3人称を表示すると述べている。

本研究では、無変化動詞の後に指差しが表現される

ものは7回見られ、それらは全て無変化動詞の主語を示していた。これは、鳥越(1991a)の知見と一致する。以下に本研究で見られた表現を挙げる。

「子ども」「会う」指差し (目的)「どっち」

「考える」指差し (主格)

(指差し (目的) は、落ちている本を示している。文末の指差しは主格を示し、「考える」の表現の主格が子ども2人であることを示している)

“子ども達は出会って、それをどっち (のものにするか) 考えている”

42. 表情の変化によって感情を示すこと

Liddell (1980)・市田 (1991)・長南 (1994c) は、手話では、表情によって、事物や事態の状態、感情などを表す、副詞的役割があると述べている。

本研究では、表情の変化により、感情と状況を表すものがみられた。感情は137回で主に役割演技の際の表情の変化であった。それに対し、状況を表す表情の変化は5回見られた。以下に、本研究で見られた、状態を表す表情の変化を挙げる。

状況を表す表情の変化

「ケンカの様子」(繰り返す) (困った感じの表情)

(この困った感じの表情により、ケンカがずっと続き、困った状況であることを示していると思われる。)

この、表情により状況を表すというものは、全体の中で5回しか示されておらず、本研究では表情により、状況を示すとは言い難い。

43. 首振りによって否定を示すこと

市田 (2001) は、否定疑問文に対する応答の首振りには、「基本タイプごとに異なる4種の首振りがある」と述べている。

しかし本研究では、否定疑問文は表現の中に現れなかったため、応答の4種の首振りを見ることはできなかった。否定疑問文の応答としてではないが、本研究では、否定を表す首振りが5回見られた。本研究では、否定疑問文を表現するよう、意図的に題材を選んだ訳ではないので、否定疑問文を使用し、それに応答する課題を設定し、否定疑問文に対する応答の首振りを確認する必要があるが、本研究では扱わないこととした。それ故、手話では、首振りは否定の意味を有するだけで、本研究では述べたい。

44. 非手指動作により副詞的表現を示すこと

長南 (1994c) は、「手の動きと同時に、または、手の動きを伴わないで、表情、頭の動き、上半身などの手以外の動きで述語を修飾する」ことで、副詞的表現を表すと述べている。

本研究では、手話表現を伴わずに副詞的表現を表情・体の動きの非手指動作で示したものが、11回見られた。その表現された副詞的意味を以下に挙げる。

勢い5回、一心不乱2回、とても2回、厳しい1回
勢いは、体の動きで表現しており、その他の一心不乱ととても、厳しいは表情で表現していた。中でも、とてもという副詞的意味を表す際には、目を力強く閉じ、力を込めた表情で示していた。

45. 手話の形態の種類として、辞書形・異形・一致・動作の4つがあること

白澤・斎藤(2002)は手話の分類として、辞書形・異形・一致・相のカテゴリーを作成している。辞書形とは、「語形変化をともしない基本形」、異形とは、「辞書形に手型や位置などの音韻的变化が加わったもの」、一致とは、「方向動詞で空間を代名詞的に使用することで運動軌跡の起点、終点に変化したもの」、相とは、「動詞の運動軌跡を変化させることによって副詞的に意味を付加したものと、それぞれ述べている。

本研究では、表現の中に見られる全ての手話表現を分類した。その際、以上の辞書形・異形・一致・相の他に、動作的な表現が多く見られた。それ故、本研究では、手話の表現を、辞書形・異形・一致・相・動作に分け、手話を分類した。以下に、その示された回数と全体からの割合を挙げる。

辞書形783回76.8%, 異形19回2.2%

一致85回8.3%, 相3回0.3%, 動作126回12.4%

また、『手話経験が豊かな群』と『比較的手話経験が少ない群』を比べると、前者では異形・一致・相・動作の割合が、比較的高く、後者ではそれらの割合は大変低く、ほとんどが辞書形であった。相は、全体で3回しか表現されず、また割合も0.3%であるため、一般的な表現とは言い難い。これらより、本研究では手話の形態の種類は、辞書形・異形・一致・動作の4つが存在すると言える。

一般的な特徴とは言えないが本研究で存在が確認できた表現

7. 助動詞として、「いた」「したい」「中」「ない」「で」「すか」「してみる」「違う」「終わり」が見られたこと
9. OVS という語順が見られたこと
11. 時制を表す助動詞として、「中」が用いられたこと
13. 文末のうなずきで、同意、補足、断定、決心、疑問の役割を示したこと
19. 名詞+関係節の語順が見られたこと

20. 後置詞が用いられたこと
23. 接続詞的な役割演技が示されたこと
29. 接続部のうなずきにより、内容、逆説の役割が見られたこと
32. 動詞的な意味を持たせた代名詞を、①動詞の後、②動詞の前、③動詞と同時に示し、動詞の主語を表すこと
40. 文末の指差しで、場所を示したこと
42. 表情の変化で物事の状況を表すこと
45. 手話の形態の種類として、相を表すものがあること

本研究で存在が確認できなかった表現

4. 複合名詞により、日本語と語順が一致しないこと
16. 物事を強調する修辭疑問文が用いられること
17. 理由を強調する修辭疑問文が用いられること
24. 役割演技の受け身構文について
33. 同時性があること

5. 考察

本研究では、手話の特徴をいくつか示すことができた。そして、その中には日本語と異なる特徴も含まれていることも示すことができた。語順においては、手話も日本語も SOV という語順で同じであったが、形容詞と名詞の語順は日本語とは異なり、名詞+形容詞と表され、疑問詞においては、明確に日本語とは異なる語順が見られた。また、一般に補文構造をもつ日本語とは異なり、手話においては単文を基本の単位としている。こういった日本語との語順の差違は、手話という言語が日本語とは異なるということの証明と言える。

手話は日本語の影響を強く受けていることは言うまでもないが、手話独自の文法構造も存在することが分かる。手話には、助詞がないと言われ、本研究でも、指文字によって格助詞「が」がいくつか示されただけであった。しかし、手話においては助詞を用いるのではなく本研究では、手指の位置や動き、また時間差を用いて表現することで、格関係を示している表現が見られた。また、主語や目的語、対象を示す際には、体の向きの変化、視線、表情、うなずき、指差しなどによって示していた。日本語においては、語形変化を用いて時制を示すが、手話では時制を示す語形変化は見られず、本研究においては、助動詞的な手話単語によって「過去」や「完了」が見られた。

本研究で明らかとした手話と日本語の違いから、聴覚障害者の中には思考・認知の方略において聴者とは

同じとは言えない者もいるのではないだろうか。事実、ろう児は使役表現や接続詞、重文の理解が困難だという。それらは本研究で存在が確認された手話の特徴である。役割演技を用いる使役構文や接続詞的な用法が存在し、関係節をいくらか用いるものの、単文が基本であることとの関係は否定できない。そして、これらの手話表現を利用し、ろう児に日本語の理解を促す学

習面での効果を期待できる。また、学習面以外では、表情など非手指動作によって感情を示すことのできる手話を用いることにより、本当の意味でのスムーズな対話ができる効果の可能性は計り知れない。このような、学習面、情動的な面での手話の効果の可能性を、手話の特徴について考察した本研究から提言できるように思う。

【資料A】手話表現の分析結果の一例

手話表現	分かる	終わり	納得?	どっち	分からない	構る	おじいさん	ほっとする	
右手の動き	分かる	終わり	納得?	どっち	どっち	どっち	おじいさん	ほっとする	
左手の動き	-	終わり	納得?	どっち	分からない	構る	-	-	
表情			疑問					ほっとした感じ	
うなずき				中		中			大
口形	わかつ	た				ば	おじいさん	は	
視線	○	○	○	○一下	下	下一○	○	○	
その他		首を傾げる						体を後ろにそらす	

【資料B】アンケートの集計(左)と手話表現者と受信者の関係(右)

呼称	手話使用年数	性別	年齢	両親	幼稚	小学	中学	高校以降	手話開始年齢	使用頻度	受信者	間柄
A	2	女	17	健聴	ろう	ろう	ろう	普通	15	4	ろう者	友人
B	2	女	20	健聴	ろう	普通	普通	普通	18	1	ろう者	友人
C	3	男	23	健聴	ろう	普通	普通	普通	20	3	聴者(著者)	友人
D	3	女	19	健聴	普通	普通	普通	ろう	16	4	ろう者	友人
E	4	男	20	健聴	普通	普通	普通	ろう	16	4	聴者(著者)	友人
f	16	女	19	健聴	ろう	ろう	普通	ろう	3	1	ろう者	友人
G	17	男	33	健聴	普通	普通	普通	ろう	16	1	ろう者	友人
h	19	女	19	ろう	普通	普通	普通	普通	0	1	ろう者	友人
i	24	女	27	健聴	ろう	ろう	ろう	ろう	3	1	ろう者	友人
j	29	女	35	健聴	普通	ろう	普通	普通	6	1	ろう者	友人
k	31	女	37	健聴	ろう	ろう	ろう	ろう	6	1	ろう者	友人
l	35	女	38	健聴	ろう	ろう	ろう	ろう	3	1	ろう者	友人
m	37	男	40	健聴	ろう	ろう	ろう	ろう	3	1	聴者(著者)	初対面
n	38	男	41	健聴	ろう	ろう	ろう	ろう	3	1	ろう者	友人

【引用・参考文献】

本名信行 (1978) 伝統手話の語順について「手話の諸相」編者、F. C. パン 田上隆司 文化評論出版 pp.65-75

Liddell, Scott. (1980) American Sigh Language syntax. The Haugue: Mouton

米川明彦 (1984) 手話言語の記述的研究 明治図書

鳥越隆士 (1988) ろう児における手話言語獲得—研究の動向と展望 日本手話学術研究会論文集 pp.39-64

Comrie, B. (1989) Language Universals and Linguistic Typology: Syntax and Morphology. (second edition) ;パーナード・コムリー 言語普遍性と言語類型論—統語論と形態論— 松本克己・山本秀樹訳 ひつじ書房 1992年

市田泰弘 (1991) 日本手話の基本文法 「手話通訳の基礎」 神田和幸編 第一法規

鳥越隆士 (1991a) 日本手話の文末の位置について 手話学研究, 12 pp.15-29

鳥越隆士 (1991b) 日本手話 (Japanese Sigh Language) の動詞の分類について 日本手話学術研究会第17回大会発表予稿集 pp.10-12

市田泰弘・木村晴美 (1993) 日本手話における非手指動作 (1) 文法マーカー 日本手話学会第19回大会予稿集 pp.8-15

小田候朗 (1993) アメリカ合衆国における Bilingual/Bicultural アプローチ 国立特殊教育総合研究所報告書

都築繁幸 (1993) 今こそ手話とは何かが問われている—文部省報告1993の意味するもの— トータルコミュニケーション研究会会報, 56, 27.

文部省 (1993) 聴覚障害児のコミュニケーション手段に関する調査研究協力者会議報告

市田泰弘 (1994) 日本手話の文法と語彙 日本語学, 13 pp.25-35

小田候朗 (1994) 手話の言語発達評価について 日本手話学会第20回大会講演論文予稿集 pp.19-22

神田和幸 (1994) 手話学講義 福村出版

長南浩人 (1994a) 手話の構造の違いが文の記憶、理

- 解に与える効果についての考察 第27回全日本ろう教育研究大会研究収録 pp.16-17
- 長南浩人 (1994b) ろう学校生徒の手話表現に関する研究 聴覚言語障害, 23(2) pp.65-74
- 長南浩人 (1994c) ろう学校高等部生徒の手話と日本語の副詞的表現の使用に関する研究—絵の内容を伝える課題において— 聴覚言語障害, 23, 3 pp.121-129
- 木村晴美・市田泰弘 (1995a) はじめての手話 日本文芸社 pp.19-20
- 木村晴美・市田泰弘 (1995b) ろう文化宣言 言語的少数者としてのろう者 「現代思想1995年3月号」 青土社
- 神田和幸・藤野信行 (編) (1996) 基礎からの手話学 福村出版
- 長南浩人 (1997) 学習者の手話を利用した日本語構文指導 ろう教育科学 39(3) pp.135-151
- 市田泰弘 (1998a) 日本手話の名詞句内の語順について 日本手話学会第24回大会予稿集 pp.50-53
- 市田泰弘 (1998b) 日本手話の文法 言語, 27(4) pp.44-63
- 長南浩人・井上智義 (1998) 聴覚障害者のリハーサル方略—文章を記憶する際の最適な活用モードを考える— 教育心理学研究, 46 pp.413-421
- 斉藤道雄 (1999) もう一つの手話 聾者の豊かな世界 晶文社
- 市田泰弘 (2000) 誤解される言語・手話 「ろう文化」 現代思想編 青土社
- 市田泰弘・川畑裕子 (2000) 日本手話の助動詞について 日本手話学会第26回大会予稿集 pp.6-7
- 小藪江聡・木村晴美・芳仲愛子・市田泰弘 (2000) 日本手話におけるロールシフト 日本手話学会第26回大会予稿集 pp.8-11
- 木村晴美・市田泰弘 (2000) ろう文化宣言以後 聾の経験—18世紀における手話の「発見」編, ハーラン・レイン訳, 石村多門 東京電気大学出版局 pp.396-408
- 長南浩人 (2000) 聴覚障害者の物語の読解に対する手話表現付加の効果 特殊教育学研究, 37(4) pp.61-68
- 市田泰弘 (2001) 日本手話の非手指動作の基本タイプについて 日本手話学会第27回大会
- 小藪江聡・木村晴美・市田泰弘 (2001a) 日本語と手話の対照分析から通訳指導を考える—ロールシフトの場合—全国手話通訳問題研究討論集会資料集
- 小藪江聡・木村晴美・市田泰弘 (2001b) 日本手話の使役構文 日本手話学会第27回大会
- 金澤貫之 (2001) 聾教育の脱構築 明石書店
- 長南浩人 (2001) 日本手話・中間型手話・日本語対応手話の構造の違いについて ろう教育科学, 43(3) pp.165-174
- 白澤麻弓・斎藤佐和 (2002) 日本語—手話同時通訳における作業内容の分析 特殊教育学研究, 40(1) pp.25-39
- 小藪江聡・木村晴美・市田泰弘 (2002) ロールシフトの接続指摘用法の指導—「反応」をめぐって— 第18回全国手話通訳問題研究討論集会資料集